

伊豆縦貫自動車道新 IC 周辺（予定地）の地域振興のための提案

日本大学国際関係学部学生団体 文化伝承発信研究会

指導教員：助教 松浦康世

参加学生：曾根彩菜、高杉奈央、佐々木碧、唐丹、岡田実凡、
今村花奈子、大槻佳奈、大森麗奈、小畑理子、亀井彩花、
倉石朱莉、黄柏熏、サンチェス・ダビッド、塩田彩乃、
相馬明歌音、ソン・ジョンホ、高橋芽衣

1. 要約

河津町には、河津桜や河津七滝等の優れた観光資源があるが、近年観光客の減少が続いている。一方で、県東部地域は「伊豆半島ジオパーク」の世界ジオパーク認定、「静岡水わさびの伝統栽培」の世界農業遺産認定、2020 東京オリンピックパラリンピックの自転車競技の伊豆市開催など、国内外から注目が高まっている。このような中、河津下田道路の河津 IC（予定）、逆川 IC（予定）の整備・開設が進められていることから、この整備を機に河津町の魅力を国内外に発信し、交流人口の拡大を図ることが求められている。

大学生が地域に出向き、周囲の協力を得ながら自ら行動を起こすことによって、河津町に新たな風を吹き込むことが可能であると期待されている。また、日頃より日本語や日本文化の発信を研究している学生にとって、地域の魅力を探り、活性化方策を検討するプロセスは、将来に向けた貴重な学びの場となる。本研究を、河津町との継続的な関係性を構築していく機会としたい。

2. 研究の目的

本研究は、河津町の魅力を大学生の目線で取材し、既存の観光資源や新たに整備される IC を活かした新たな魅力の創出に向けた提案を行うことを目的とする。

3. 研究の内容

研究の具体的な内容は次の通りである。

- ① 河津町の魅力を知る：河津町の魅力について、留学生も含めた大学生の目線による分析を行うため、取材を行う。現地の民宿に宿泊し、民宿スタッフや地域おこし協力隊員、ふるさと案内人などの協力を得ながら、日帰りの取材では得られない魅力の発見に取り組む。
- ② 新たな魅力の創造について考える：取材結果を持ち帰り、学内で学生ワークショップを行う。河津町の魅力と活性化方策について、それぞれの考えを交換し合い、学生としての意見を取りまとめる。
- ③ 最終成果とりまとめとプレゼンテーション：学生ワークショップの結果をもとに、河津町の方々との意見交換会を開く。学生は自分たちのまとめた結果について町民からの反応を直接得ることができ、また町民にとっても、若者・外国人留学生の考えを知るよい機会となる。意見交換を経て、最終的には学生案に住民の方の意見を加え、河津町の魅力と活性化方策をまとめる。

4. 研究の成果

(1) 当初の計画

実施時期：2018年7月～2019年1月

① 9月2日～9月3日 第1回町民ワークショップ参加、第1回現地視察

IC 予定地周辺を実際に歩き、地域の良いところを見つける。また、それを活かした地域の活性化について住民の方々と意見交換を行い、地域の将来像を共有する。

〈対象地域〉逆川 IC 周辺地域（逆川地域）、河津 IC 周辺地域（湯ヶ野から河津七滝までの地域）

② 9月26日 学生ワークショップ

第1回現地視察で気づいた点を取りまとめ、第2回現地視察の課題について話し合う。

③ 10月20～10月21日 第2回現地視察

第1回の現地視察とは違うメンバーにより視察を行う。IC予定地周辺だけでなく、インバウンドの可能性を調査するために有名な観光地を訪問して取材を行う。

④ 10月25日 第3回町民ワークショップ参加、中間報告

第1回と第2回の町民ワークショップの結果をとりまとめたグループ別の提案を聞き、まちづくりの方向性を住民の方と共に確認する。大学生としては、現地視察を経てとりまとめた結果を報告する。

⑤ 2月6日 最終報告

第3回町民ワークショップで出された意見も合わせて最終的な提案を取りまとめ、河津町役場と住民の方々に報告する。また、地域・大学コンソーシアムの報告会に向けて最終的な内容確認を行う。

(2) 実際の内容

ほぼ計画通り実施することができた。予定変更としては、第1回町民ワークショップの日は天候が悪かったため、現地視察は翌日の1日のみとなった。現場を見ずにワークショップに臨んだが、話し合いの中で課題とされていることを把握し、翌日の現地視察で内容を確認することができた。

また、2回の現地視察の中で撮影した写真に各々コメントをつけ、学園祭においてフォトコンテストを実施した。同時にアンケート調査を行い、大学生の間での河津町の知名度などを調査した。

(3) 実績・成果と課題

① 1つめの課題である「河津町の魅力を知る」ことについては、第1回の現地視察に6名、第2回には日帰りの2名を含めて9名が参加し、参加できなかった学生を含めた部員17名で話し合いを持った。各地域の魅力として出された意見を次に整理する。

<河津IC周辺地域の名所と魅力>

- ・小鍋地区と大鍋地区の地名には源頼朝が訪れた時の言い伝えがあり、源氏と所縁の深い場所である。「小鍋神社」はきれいに掃除されていた。
- ・「慈眼院」は米国領事ハリスの一向が下田から江戸に向かう途中に宿泊した場所であり、寺にはその時使用された椅子や皮袋が残る。また、境内には多くの石造物が建立されている。
- ・「踊子歩道」は「日本の道百選」にも選ばれているが、自然が美しく、歴史も楽しむことができる。また、『伊豆の踊子』の舞台があり、バスツアーもある。
- ・「福田家」は川端康成が一高生のとき天城越えの旅をして宿泊し旅芸人一座との出会い、名作『伊豆の踊子』が生まれたという有名な宿である。隣には伊豆の踊子文学碑があり、川端康成直筆の『伊豆の踊子』の一説が刻まれている。他にも、中島敦や太宰治も宿泊している。近くには「踊子の足湯」があり、無料で足湯を楽しめる。第1回現地視察では「福田家」に宿泊した。地元の食材を活かした料理が美味しく、川端康成が宿泊した当時の建物が残されているのが魅力である。また、川端康成の直筆や『伊豆の踊子』に関する資料が数多く展示されている。
- ・第2回現地視察で宿泊した「禅の湯」には女将を始め若い従業員が働いており、同じ目線で河津町の良さを伝えてもらった。アットホームな雰囲気ですてきなサービスなどの気配りが行き届いており、初めて訪問する客にも安心感を与える。温泉と岩盤浴だけでなく健康志向の料理や禅も体験でき、身体が清められるようである。人の温かさを感じる旅館であった。



<逆川 IC 周辺地域の名所と魅力>

- ・「普門院」は、現在は無人寺となっているが、もともと 49 の末寺を有していたという由緒あるお寺である。
 - ・「三嶋神社」は拝殿の裏手に急な石段があり、その上に本殿がある。精密で美しい彫刻がある。大きく立派ないちょうの木があり、秋には鮮やかな黄色で彩りを添える。
 - ・「さかさかわ夷りの里」では河津町役場職員 OB が中心となり、もち米をはじめとする農作物を地域住民との協働で生産している。収穫された米や野菜は秋の収穫祭で地域の人たちにふるまわれる。
- ② 2 つめの課題である「新たな魅力の創造」については、河津町の魅力を整理した上で、活性化方策として主に課題の解決策が話し合われた。次に整理する。

<河津 IC 周辺地域>

- ・小鍋地区には「小鍋神社」など興味深い場所があるが、場所が点在していてアクセスが悪い。また、景色はきれいだが、寂しい雰囲気がするので、明るい雰囲気作りが必要である。例えば、食べ物、買い物、体験など、ここに来ることの付加価値を作ることができる。
- ・湯ヶ野川沿いは景観が美しいが、外灯がないので夜は出歩けない。外灯を設置することにより昔ながらの川沿いの雰囲気を醸し出すことができる。
- ・湯ヶ野西小地区の駐車場、橋、道路、カフェなどは整備が必要である。

<逆川 IC 周辺地域>

- ・「普門院」から「三嶋神社」までハイキングコースを作るという案が出た。名所の良さが伝わりにくい現状では、日本人にはいいが外国人向けではない。釣りや収穫などの体験ができるコースを設置することにより外国人にもアピールできる。
- ・「三嶋神社」には美しい彫刻があるが、普段は管理する人がいないため、観光客が多く来ると神社や周辺の畑などが荒らされるのではと心配されている。防犯カメラを設置する必要がある。

(4) 今後の改善点や対策

研究は当初の計画通り実施されたが、1 回の訪問では調査に限界があった。また、宿泊を要する調査であるため、大学のスケジュールの中で与えられた期間内に成果を出すことは予想以上に難しいことであった。今回は様々な意見を提案するだけに終わってしまったが、それを具体的な形としていけるよう今後も河津町と関係を保ちながら活動を続けていきたい。

5. 地域への提言

IC 予定地周辺の地域振興に関しては、ワークショップで町民の方から細かい提言がいくつも出され、現状をよく把握していない大学生には細かく正確な提言はできない。そのため、現地を訪問する中で印象に残ったことを上に述べた。また、国際関係学を学ぶ学生は外国人と接する機会が多く、世界的な視野で感想を述べることもできるため、インバウンドを含めた観光客の受け入れに関して次に提言する。

① 外部に向けて魅力を発信するための手段

旅行会社のツアーではなく個人で旅行先を選ぶ場合の参考資料としてはインターネットが最も手軽に利用される。必要とされる情報には、宿泊場所、現地までの交通手段の他、名所の魅力や、おすすめの観光ルートなどが挙げられる。そこで、魅力的な「観光マップ」と「観光モデルコース」を作成するための要素について考察する。



「観光マップ」では、名所を種類ごとに色分けして示すことにより興味の対象の場所だけを検索することができるようになる。1 つ目は「ご当地グルメ」のスポットである。河津町には、わさびを使用したものだけでも「わさび味噌」、「わさびソフト」、「わさびご飯」、「あんバターわさバーガー」など数多くのご当地グルメがある。「わさび」と検索することにより食べたい物の候補を見つけることもできるようにする。2 つ目は「名所」となるスポットである。有名な観光名所だけでなく、話題となる名所も紹介する。例えば、地域をこよなく愛し魅力発信に努める「稲葉さん」のような名物人や、地域の逸話や映画のロケ地などを紹介することにより、人とは違ったルートで観光してみたいという旅行者の要望に応える。3 つ目は「文学」に関する名所である。川端康成はノーベル賞作家として誰もが知っているが、実際に『伊豆の踊子』を読んだことのある若者は少ない。踊子歩道や福田家の楽しみ方を発信することにより、若者が文学に興味を持つようになるきっかけを作る。伊豆地域には河津町だけでなく文学に関わる名所が多いため、より広域な地図も含めて作成することもできる。その他、寺院や神社などの「歴史」スポットも一つのカテゴリーとして分類できる。

「観光モデルコース」は、初めて訪れる観光客にとって非常にありがたい存在である。現地でインタビューに応じてくれた観光客の一人は、河津町観光協会に電話で問い合わせた観光ルートを決めたと話していた。特に、公共交通手段を使って訪れる観光客のために、移動の手順や時間なども含めてお勧めの観光ルートを紹介すべきである。日帰り観光や1泊観光などの滞在期間を考慮し、基本となるコース以外に、定期的にイベントなどの新しい情報も含めることによりアクセス数を確保できる。

インバウンド旅行者獲得のために情報を発信する場合は、各国のメジャーな旅行情報サイト（例えば中国なら「weibo」など）を利用し、各国語に翻訳した上で情報を発信する。外国人向け体験型ツアーを企画する場合には、異なる文化は言葉では伝わらないため動画による紹介が効果的である。

② 観光客の受け入れ体制づくり

訪れた観光客をもてなすための対応の一つとして「景観づくり」がある。例えば、トンネルを抜けてインターに続く道路から見える景色を整備する。ハリウッド式にウェルカムボードを作ることも一つの方法である。季節によって異なる植物で文字を描き出せば観光客が訪れる時期を分散できる。インスタ映えする景色を見れば IC を降りて立ち寄りたと思うのではないだろうか。次に必要とされるのは、観光ルートを想定した「休憩場所や駐車場の整備」である。現地視察では自動車が入り込むのが難しい場所にも観光名所が見られた。事故が起きないように配慮する必要がある。3 つ目の案として挙げられたのは、現地の至るところに見られた「古民家の利用」である。無料の畑利用、一定期間の親子留学、夏休みのキャンプ、民泊など、他の地域で行われている例を参考にして宿泊に利用してもらうことは、建物の劣化を防ぎ、人を招く手段となる。

インバウンド観光客に向けては、レストランのメニューや観光地の案内に英語訳をつけるとともに、特定の国からの観光客が多い場合は、その言語でも見られるよう多言語翻訳 QR コードを作成する。

③ 地元住民に対する教育

大学内で河津町についてのアンケート調査を行った結果、84 人の回答者のうち 78.6%が「河津町を訪れたことがない」と回答した。更に、「名前を聞いたことがない」や「名前を聞いたことがあるが場所がわからない」という回答は全体の 63.1%であり、同じ県内に居住している人の間でも知名度は低かった。大学生向けのイベントや県内学生ツアーの機会を企画することも有効である。また、住民の方と話す中で、すばらしい観光資源を保有している背後には地元に住む人々の絶え間ない奉仕活動があることがわかった。次世代に対しても地域の良さを伝える学校教育や行事の開催が求められている。

6. 地域からの評価

2月6日に河津町役場にて最終報告をする予定であるが、11月に中間報告を行ったところ、「大学生ならではの斬新な意見が得られた」という評価をいただいた。